

### 移送された保護ツル4羽の今

4

月12日に鹿児島県出水市より4羽のツルが移送され、保護センターで飼育が開始されてから3ヶ月がたちました。

前年と同様に、飼育開始当初はツルが落ち着くまで、飼育員と職員で24時間の監視を行いました。飲水、採餌などケージ内での行動が早くに落ち着いたため、3日目の4月14日には解除しました。その後、朝から夕方までの飼育員による監視と、監視カメラによる録画映像を使用した通常の監視の2体制による監視を続けています。

4羽はケージ放鳥直後に、水飲み、床に撒かれた餌の採餌そして水浴びと、昨年の2羽以上に落ち着いた行動を見せていましたが、なかなか飼育員になれず、放鳥数日間ケージ内での作業に苦労していました。現在では飼育員にも慣れ、ケージ内へ餌を入れるとすぐ餌箱に食べにきたり、暑さ対策のスプリンクラーを作動させると水を浴びに来たりなど、今の飼育環境に順応し、元気に生活しています。

今回の4羽も過去2回飼育を行った5羽と全く違った個性を持っていて、ケージ内をあちこち動いてミミズや昆虫を探して食べるツル、1羽他のツルと離れて行動するアウトローなツル、スプリンクラーの下に真っ先にやってきて水浴びするツル、良く鳴き、良く飛ぶツル、などなど個性ゆたかな4羽の行動から目が離せません。

これからの暑い夏を無事に過ごせるように大切に飼育をしていきたいと思えます。 鶴担当 増山雄士



移送直後の4羽

6・6・9・6・6・6・9・6・6・9・6・6・6・9・6・6・9・6・6・9・6・6・6・9

### 漫画家 なかはらかぜさん から 八代へのメッセージ! No.9



八代の夏は美しい。山々の緑は深まり、  
田んぼの明るい緑色とコントラストをつくり  
真っ白な入道雲に印象派の絵のように良く映える。  
満開の桜の時期にやって来た4羽の十べツルたちも  
八代が気に入ったらしく、余裕で八代の夏を  
満喫しているようだ。  
4羽といえば、ちょっとした家族の数だ。  
やはり、人もツルも仲間が多いほうが楽しいに  
決まっている。

# ツル放鳥特集



## 放鳥ツルからの メッセージ

3月21日の9羽の北帰行は、まさに理想を絵に描いたようなシーンだった。まさかそれが夢のごとく消え去ろうとは思いませんでした。2羽だけが八代に戻ってきたのです。今回の報告はここから始まります。

2羽は静かに、何事もなかったかのように静かに八代の田んぼに舞いおりた。関係者はただ呆然と立ち尽くすのみだった。あれだけ見事に一緒に飛び立ったツルがなぜ？舞い戻ったのか？ツルにはツルの理由があったのだろうけど、それはだれも知る由もない。一緒に行く自信がなかった。西に行くことに違和感があった。羽の欠損が影響して一緒について行けなかった等理由があるのだろうが、これは紛れもない事実である。

その後の2羽の行動を少し観察してみよう。

3月22日～4月2日まで特に変わった動きもなく、1～3番の田んぼでエサをついばんで、夕方ネグラに帰るといったパターンが続いている。

4月2日夕方いつものネグラに入らず、違う方向のネグラに向かった。翌日もやはりそのネグラの方向へ入っていった。だいたい18：30過ぎにネグラ入りしている。

4月4日、田んぼの周辺が賑やかになり、農家の方が田んぼに出入りするようになったため、ツルが警戒しながら飛び立つことが時折見られるようになった。そして、13：34に人が田んぼに入ったときに、再び飛び立った。そのまま上空を高く舞い上がり、14：41遂に見えなくなった。その日はそのまま餌場には戻ってこなかった。

アルゴス発信機では、その日の夜、遅く八代のネグラにいるように示していた。ただ、翌朝放鳥ツルは、八代の餌場に出てこなかった。アルゴス発信機は、

夜まで発信しないのでわからない。関係者で行きそうなネグラを探索したが、見当たらない。もしかしたら、北帰行か・・・その日の夜、発信機は西の方向に動いていた。萩市周辺である。翌朝に目撃情報が入り始めた。阿東町周辺の田んぼで1回、旧むつみ村で1回、そして4月8日の朝、目撃情報と写真情報が入ってきた。まちがいなく2羽のナベヅルである。足環までは確認できない。そのまま西の方向へ北帰行するものと思っていた。



澄川千賀子さん撮影



しかし、現実には4月8日、9：30には再び八代に戻っていた。2羽の放鳥ツルはしっかり八代を認識している、戻ってきたという事実は、大きな成果といえるのではないだろうか。萩市のむつみ村まで距離にして約60km、時速40kmで飛んだとして、1.5時間の距離を飛んでいることになる。昨年は真北の益田までやはり60kmの距離で休憩している。益田は、3週間滞在してそこから北の日本海に飛び立ちましたが、今回はきつと落ち着けるネグラを見つけられなかったのではないかと推測できます。八代に帰れば安心できるネグラがあるとツルは認識していることになり、次のシーズンに八代に帰ってくる可能性が出てきたのではないかと思います。

さて、戻ってきた2羽の放鳥ツルは、またしばらく餌場とネグラを歩き来して、普段とおりの生活を始めていました。

そして、4月15日朝（6：10）一旦は、餌場に出てきましたが、午前8：20に遂に東方向へ飛び立ちました。その後、北西の方向へ軌道修正し、飛び立っていきました。どれも北帰行とは思わずにまた舞い降りると思っていましたが、結局この飛翔が八代を最後に飛び立った日になりました。



その日の夜から朝方にかけてのアルゴスのデータが、韓国領のウルルン島近く（八代から直線で386km）にいたことがわかり、やっと北帰行を始めたことが確認できました。今度は明らかに大陸に近い方向であり、このまま北西に進めば、韓国に到達するものと思われました。・・・しかしながら、翌日のデータは方向を北方面に修正し、まさに真北に向けて飛びつづけているようです。それほどまでに体内磁石というカツルには、方向を示す何かがあるのでしょうか。正直、北帰行させることの難しさを目の当たりにしました。

4月16日から17日にかけて、今度はウルルン島からさらに360km飛んだ位置にツルは移動していました。昨年とほぼ同様の位置です。併せて、746kmを既に飛んでいることとなります。まさに後一日で大陸に到達できる位置に2羽の放鳥ツルはいました。祈るような思いで毎日のデータを見ていましたが、翌日18日に大陸に到達を示すデータが出てきませんか？？？なぜかわかりませんが、この地点でまたしてもデータが止まりました。日々のデータが北ではなく、東の方角へ移動しているのです。とても飛行しているとは思えません。少しずつ東へ移動しているのがわかります。・・・厳しい現実が待っていました。いろいろ疑問が湧いてきます。なぜ2羽のツルは、ウルルン島から韓国に渡らなかったのか、大陸は見えていたのではないかと思うのですが・・・その答えをいまだに自分の中で解決できずにいます。



ウルルン島から韓国に渡らなかったのか、大陸は見えていたのではないかと思うのですが・・・その答えをいまだに自分の中で解決できずにいます。

2回目の放鳥が我々に教えてくれたことがいくつかあります。

#### ① 放鳥方法

第1回目は、飼育員から放鳥

第2回目は、自然放鳥（半強制的自然放鳥）

追われるように出て行った

② 馴化については、昨年直前より明らかに進歩が認

められます。

3月3日放鳥（第1回目）3月20日に北帰行

→放鳥後18日目

→ネグラ入りは放鳥から16日目

12月21日放鳥（第2回目）3月21日に北帰行

→放鳥後94日目

→ネグラ入りは放鳥から9日目

家族Cとの行動が物語っています。

少なくとも北帰行の際、他のツルたちと同調していた。

→細かい分析だが、果たして北帰行の1グループとして認知されていたかどうかは定かではない。同じグループであれば、体力のないもの、幼鳥等にペースを合わせるといわれているが、少し遅れた2羽に合わせるという行動がみられなかったのではないか

4月4日～8日までの行動について（萩市～八代への帰還）

ネグラの認識（大谷ネグラ、大藤谷ねぐら、砂堀ネグラ等）

#### ③ デコイの持つ二面性について（仮説）

まず、デコイの効果については、27羽のデコイのうち、17羽、4羽、4羽、2羽の4箇所を設置した。観察の結果、デコイのいる場所を中心に移動していることがわかった→このことはデコイの効果として今後の参考になるし、縄張りをコントロールできる可能性が出てきた。

落ち着かせる効果と反面して、3月に入った頃に、ネグラ入りする時間が家族Cと放鳥ツルにずれが生じてきたこと→原因の一つにデコイがあるために、ネグラ入りを遅らせてしまったかもしれない。（デコイを仲間として認識し、誘うような行動がみられた）→結果、家族Cとの仲間としての意識が薄くなってしまったかもしれない。



デコイと放鳥ツル

このように、放鳥ツルはわれわれに知られざる一面をいろいろ教えてくれている。ツルからのメッセージを少しでも早く理解できるようになって、再び八代に多くのツルたちが戻ってくるように今後も努力していきたくと考えています。

周南市教育委員会 生涯学習課  
鶴担当主幹 徳永 豊